慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マイケル・ヴァルツァー著 『聖徒の革命』： 急進的政治の起源の研究
Sub Title	M. Waltzer:The revolution of the Saints:A study in the origins of radical politics
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1967
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.40, No.8 (1967. 8) ,p.183- 188
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19670815-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Michael Waltzer:

The Revolution of the Saints:

A Study in the Origins of Radical Politics

Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1965, x+334pp.

マイケル・ヴァルツァー著

『聖徒の革命』——急進的政治の起源の研究

ステファン・ツヴァイクはつぎのように書いている。

「波うつている黒い僧衣に身をつつんだこの痩せて苛酷な男がコルナヴァンの城門をくぐつた瞬間から、あらゆる時代を通じていちばん重要な実験のひとつがはじめられた。——それは、無数の生きた細胞をふくんで息づいている国家を硬直した機構に変え、それぞれの感情や思想をもつている民衆をただひとつの体系のなかにおしこめる実験であつた。これは、思想の名において住民全体を完全に統制しようとしたヨーロッパで最初の試みであつた。」（『権力とたたかう良心』高杉一郎訳（みすず書房）ツヴァイク全集第十五巻、五四頁）

近代ヨーロッパにおける新旧両教会の争い、聖バルテレミイの虐殺、三十年戦争、恐るべき惨禍を生ぜしめたカルヴィニズム、だが

ツヴァイクをして慄然たらしめるものは、新しい神聖なる秩序を求めようとする良心の強制（forcement des consciences）であり、その政治的急進主義である。彼にとつてカルヴィニズムは、二十世紀の全体主義的独裁と二重写しに見える。確かにカルヴィニズムはひとつの宗教的・政治的イデオロギーであつた。そしてその狂信化された権威主義は、自由と理性という西欧的伝統とは恰もアンティテーゼをなすものであつた。「ひとりの人間を殺すことは、けつして教義をまもることにはならない。それはあくまで人間を殺すことでしかない」というカステリオンの言葉に、その真実と明確さのゆえに永久に忘れられることのない最も人間的なすばらしい言葉だ、と書き加えるツヴァイクの高貴なヒューマニズム、そして彼の個人的な悲劇に対して、われわれは畏敬と憐憫をそそられざるを得ないであろう。

実際に、ヨーロッパの近代政治は神聖でもなければ正義でもなかつた。カルヴィニズムの最初の試みは幾たびも、さまざまに変容しながら反覆されてきた。カルヴィニズムは現代性である。しかしながら現代に呼び戻すべきものは、神の言葉でないことは勿論、辛辣なモノローグや怒りと憎しみをこめたリフレインではない。この点でM・ヴァルツァーの『聖徒の革命』は、カルヴィニズムの急進的政治の起源を学究的に追求したすぐれた労作といえよう。本書は主としてイギリスのカルヴィニスト、すなわちピューリタンの思想と行動の研究である。著者はつぎのように述べている、「私は後日、私の急進主義研究を続けようと望んでおり、また他の諸国や歴史と関連して、政治的熱狂とか規律を可能にし、かつ必然的にさえするような諸々の特殊な環境をさらに充分に記述しようと望んでいる。そしてそれこそ、明白に真実であるもの、すなわち急進的政治がさまざまに異なつた形態をとり得ることを示唆し、それがわれわれ現代においてとつている著しくトータルな形態に対してひとつの批判を展開する時なのであろう。だがここで私が述べたことのなかには、そのような批判の含みは一切ない。私は急進主義と全体主義との安易な、そして誤つた同一化――過去十五年ないし二十年、歴史学者、社会学者、および政治学者のあいだに共通したものであつたが――を繰り返そうとも、それに逆らおうとも欲しないからだ。私の唯ひとつの目的は、現代人にはかくも魅惑的でないピューリタン的急進主義というものを、人間的に理解可能ならしめることである」（傍点筆者）と。

本書の構成は、第一章　急進的政治の出現、第二章　カルヴィニズム、第三章　カルヴィニストの政治に関する二つの事例研究（ユグノーとメアリー女王時代の逃亡者）、第四章　ピューリタン的聖職――近代政治と急進的知識人、第五章　伝統的政治世界への攻撃、第六章　規律と労働の新しい世界、第七章　ピューリタニズムとジェントリー――職業としての政治、第八章　政治と戦争、第九章　結論、である。ヴァルツァーは以上の各章において、カルヴィニズムがすぐれて政治的宗教であつたことを証明し、それと同時にその担い手である聖職者たちが宗教的知識人として、政治的倫理をもつていたことを強調する。それは、M・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』における有名な経済的倫理、あるいは

またE・フロムの『自由からの逃走』における精神分析的解釈を踏まえながら、新たに問題提起をなすものであろう。そしてさらに、すでにみたように、急進的政治の比較研究への手掛りを求める意欲をも窺うことができる。こうした点に留意しつつ、ヴァルツァーのカルヴィニズム解釈を紹介しておきたい。

神の言葉にしたがつて既成秩序を破壊し、社会をリフォームしようとする情熱は、カルヴィニズムの聖徒たちに始まる。人間の労働が政治の世界において創造的役割を果すという理念は、確かに「新しい政治」であり「近代的政治」であつた。そのようなことは、例えばイタリア・ルネサンス期における政治活動にさえあらわれなかつた。マキアヴェリの『君主論』にしても、市民的徳性への希求はあつたにせよ、個人の技能・計算としての権力意識にとどまり、「冒険の政治」たるにすぎなかつたのである。カルヴィニストにとつて、政治はもはや個人的な駈け引きではなかつた。それは神の命令――そして聖職者たちみずからのイメージ――によつて、世界を改革するという内奥の衝迫であつた。

われわれは、旧きイングランドの伝統的な封建的絆を断ち切つたピューリタンを想起すればよい。彼らにとつて現実は、革命か逃亡＝巡礼（ピルグリメイジ）の旅か、いずれかの選択以外にあり得なかつた。彼らは《不安定な》聖徒であつた。ヴァルツァーの指摘するように、急進主義とは「逃亡者の政治」であり、カルヴィニズムこそ「逃亡者のイデオロギー」であつた。しかしながら彼らは、あてどなく彷徨う流浪者ではなかつた。巡礼の旅は殉教者のロマンスでもなく、遊行僧の遍歴でもない。それは聖職者、牧師を中心として組織化された、政治的な運動であつた。聖職者は伝統的権威や秩序から自由になつた「自由な知識人」であつたが、しかしルネサンスにみられる激発的な天才的個性ではない。むしろ彼らはルネサンス的華美を嫌い、そのうちに人間の堕落を視きみる。ピューリタンはみずからの良心により、神の命令に絶対服従する堅牢不抜な信仰者であつた。世界を愛し調和を求めたのではなく、世界を克服し救済せんとする強烈な仕事、ピューリタンの生活態度がしばしば狂信と見紛うものであつたとしても当然である。

このように、中世の「存在の偉大なる連鎖」から解き放たれたカルヴィニストは、その日々の生活において厳格な規律と自己抑制をまもり、どのような職業をも神の召命として受けとる。それはウェーバーのいう《世俗内的禁欲》にほかならない。しかも彼らは、政治を労働へ、宗教的義務へと転化する。神の栄光をますために、新しい秩序と関係の創造に奉仕するということはまさに革命的精神であつた。この点で、カルヴィニズムは信仰の内面化、神との精神的交わりを深めて行くルーテリズムとは対照的である。政治は個人的利益ではなく、公共的職業なのだ。ひとつの宗教思想への非妥協的な、不断のコミットメントとして、政治を追求するカルヴィニストの良心は、政治と戦争とに新しい職業倫理をもたらした。それは経済的企業家に対応する「政治的企業家」と言つてよく、典型的にはピューリタンの精神に肉体化され、政治的規律、新しい義務の禁欲主義として、クロムウェルの軍隊に継承されたのである。

伝統的政治世界との断絶について著者の精緻な分析を記すいとまはない。ここには body politic から ship of the state へのイメージの移行に一言しておく。宇宙的・自然的調和、その位階秩序にもとづく「存在の偉大なる連鎖」を放擲したピューリタンの国家観は、もはや政治体という有機体的比喩に満足できなかつた。それは国家の構成員が部分として機能的に統合化される調和的な秩序を意味していたが、ピューリタンにとつて政治の世界は荒れ狂う大海であり、人間は危険に遭遇しながら航海する旅人である。国家という船の比喩は、トーマス・アダムスの『聖地へ向う精神的航海者』（ロンドン・一六一五年）に最もよく示されている。一六四三年ステッフェン・マーシャルの説教には、「キリストの栄光、この教会と王国の制度、然り、キリスト教王国すべての福祉が……ことごとくかの船体に積み込まれ、その舵取りは殆んど諸君にゆだねられているのだ」と述べられている。このようなイメージには、船長と船員の反抗、緊密な政治的単位、乗組員の《契約》、政治の新しい基礎づけの建設など、いずれも革命的な要素が含まれていた。ともかく政治は混沌である。神自身が政治の目的、船の旅路の目的を定めている。かくして神の意志と人間の努力はより鞏固に結び合わされたのである。巡礼の船出はすでに想像ではなかつた。

ところで、カルヴィニストが出現した歴史的コンテクストは、十六世紀から十七世紀にかけてのカトリック教会の衰退、絶対主義の形成、経済的発展といつた社会変動、いわゆる《近代化》への転換期である。それを最も鋭く反映したものは、とくにイギリスのピューリタンであつた。彼らの直面した「社会問題」とは、第一に急激な人口増加、および囲い込みと牧羊業によつて惹起された村落共同体の解体、多数の浮浪者と乞食の群れ、経済的貧困者の都市への流入であつた。第二に急速な都市化現象、ロンドンの人口はエリザベスの即位からジェームズの死までの期間に三倍に増大し、三十万を超えるに至つた。ロンドン郊外にはかつてない程犯罪が頻発し、物情騒然たる有様であつた。第三に宗教的空白、この時代にはイギリス国教会の再興が行なわれたにもかかわらず、牧師不在の教区や荒廃にまかせた教会が多くあり、精神的指導も宗教活動も剝奪された人びとの信仰喪失が著しかつた。第四に以上すべてを含めて社会的組織化の問題があつた。旧秩序の崩壊は群衆をいかに社会集団に再組織するか、という差し迫つた問題を提示していた。かかる危機状況に対して悲しみに沈んだ社会的批判やテューダ朝のもとに立法活動がみられたけれども、それらは真にラディカルなイデオロギーではなかつた。ピューリタニズムは、宗教的な意味において人間の罪のラディカルな意識であるとともに、すぐれて人間的な決定であつたわけである。すべての人間は労働しなければならない。労働は宗教の証明（あかし）である。無秩序と懶惰に課する信仰と労働の自己規律、かかる倫理こそ社会的基礎であり、社会的に拡大化されて、ジェントリーの「新しい市民性」として定着して行く。

結論の部分でヴァルツァーがつぎの点を指摘しているのは注目に価する。先ずカルヴィニズムと自由主義的イデオロギーとの関係である。宗教会議の政治における集会、討論、選挙、契約などはジェ

ントリーの政治活動に影響をあたえ、それらが自由主義的政治を準備したことは事実である。しかしカルヴィニズムは個人の良心を主張するが、それは個人の自由、そして思想の自由ではなく、集団主義的規律を強制する。カルヴィニストの神聖な共和国の規律的制度は、市民の政治的徳性にもとづく自由主義の自己確信と鋭く対立している。ロック的思想の勝利は、聖徒らが直面した不安と恐怖の克服をあらわすもので、人間社会に対する宗教的・イデオロギー的抑制がもはや不必要となつたことを証示していた。聖徒が自由主義的ブルジョワとなる前には、忘却すべきもの放棄すべきものが多くあつた。ピューリタンの創造的な時期には少なくとも、聖徒の信仰と自由主義者の人間理性への確信と寛容とのあいだに共通したものは認め難い。

ほぼ同様なことはカルヴィニズムと資本主義との推定上の関連についても言える。自由主義と資本主義はピューリタニズムがその創造的エネルギーを使い果した後はじめて、完全に発展したのである。資本主義の精神はラディカルな宗教的熱狂の没落とパラレルである。世俗内的禁欲が企業家的自由に先行し、新しい経済と政治のための規律的基礎の形成を助けたとしても、聖徒の規律それ自体が資本主義的では決してなく、資本主義的人間の歴史的条件づけであると解釈する場合に注意を要する。ウェーバーの記述するように、禁欲は目的としての富の追求を排斥しながらも、富の追求を職業労働の成果として、神の恩寵の徴として考え、禁欲的な節約による資本の形成をもたらした。しかし、ピューリタニズムは企業家的活動よりもむしろ経済的抑制を強調したのであつた。聖者が世俗的・合理的経済行為を学んだとしても、彼らの労働は罪からの解放であり、予定への救済なのであつた。さらにイギリス、フランス、スコットランド、オランダの特定集団——貴族、聖職者、紳士、商人、法律家など——が何故カルヴィニストになつたかという問題は、カルヴィニズムが不安を誘発するイデオロギーであつたからではなく、むしろそれを受容する彼らの能力に求めるべきである。また資本家の多くが自由を享受していた都市生活者たち——聖者が最も嫌悪していた——から生じていつたことも見逃してはならない。

カルヴィニズムは無秩序と不安の現実体験に対するひとつの可能な反応の方法なのだ。聖徒の選択は歴史的コンテクストのなかでは合理的、かつ予測可能であつたと言える。すなわち、カルヴィニズムおよびピューリタニズムは移行段階、あるいは近代化のイデオロギーとして機能的役割を演じたのである。このことはジァコビニズムとボルシェヴィズムの急進的政治についても類推し得る。その一般的特徴はつぎの如く要約されよう。

(1)伝統社会から近代社会への移行のある時点には、一群の《異邦人》があらわれる。彼らはみずからを聖徒、選ばれたる者とみなし、新しいイデオロギー的規律を求める。

(2)彼らは追従者を厳正に規律化し、また己れの徳性を神の恩寵の徴となす。そして自己自身のうちに予定と最後の勝利への確信をみつけだす。

(3)彼らは現存世界を闘争として理解する。周囲へ憎しみを感じ、

絶えず機会を計る。

(4)聖徒の組織は新しい秩序の性質を示す。

(a)　新しいイデオロギーへのコミットメント――それは古い忠誠心（家族、ギルド、領主、国王など）の放棄を要求する。

(b)　このコミットメントは意志行為にもとづくものである。

(c)　それは常に証明されねばならない。聖徒はかつて拒絶されていたように、追放される身でもある。

(d)　彼らはすべて集団内で身分的には平等である。彼らの労働と功績が規準である。

(5)聖者の行動は新しい政治を生みだす。

(a)　その行動は、ある客観的準拠に応じて政治的・宗教的世界を再構成しようとする組織化された努力である。その目的追求は既成秩序を無視してなされる。

(b)　政治は一種の労働へ転化される。彼らは個人的感情を一切抑制して、規律された方法で振舞う。

(c)彼らは政治を自由に試みる企業家である。

(6)聖者の歴史的役割は二重である。外面的には旧秩序のトータルな破壊とトータルな社会再建を目ざす。内面的にはその規律というものが社会変動の苦痛に対して創造的な反応を呼び起す。それは自由と《不安定》への治癒をあたえるものである。

しかしながら、移行から安定へと向うにつれて、宗教的な熱狂は次第に影をひそめ、秩序が樹立されるや、普通の人びとは神の戦いを見捨てる。ピューリタン的聖徒は、王政復古時代、あるいはホイッグの世界にはふたたび《異邦人》たらざるを得なくなった如くに。急進的政治のイデオロギーは現実に堪え切れるだけ、堪えるであろう。だがやがてその命脈が尽きた時、それは《イデオロギーの終焉》を告げることになるのか？「今や聖者らしき活力はそれ自身の病理を有し、因襲主義もそれ自身の健康を有することが示唆された。平和は平和の諸徳性を有していた。聖なる戦いがそうであつたと同様に」という結びの言葉は意味深い。過ぎ去りし良き日の神話は、恐らくもつともナイーヴな社会批判の形態なのだろう。

（奈良　和重）